

「テサロニケの信徒への手紙一」⑬

教会成長の三要素

(「テサロニケ五・一二〜一五」)

某ネット通販サイトを見ていたら面白いものを見つけた。いわゆるチプカシ(「チーフカシオ」と言われる千円札一枚でお釣りがくる腕時計なのだ)が、コメントの中に「教皇様の腕時計」というレビューが！思わず「ムムッ」と唸り、すぐさま購入と相成ったわけであるが、つけてみるとなかなか良い。時間も正確だし視認性もばっちり。デザインだってミニマルな感じで悪くない。さすが「庶民派」を自他ともに認める教皇である。

そんな彼が数年前に語ったのがこれ。「いまだに『キリストはいいが、教会はいやだ』という人がいる。しかし教会こそが私たちを教会と神に導くのです(中略)信仰は個人に関する行為であるが神は私たちを家族として招いておられます。」今朝は神に呼び集められた神の家族が成長していくために必要なことを三つ学ぶ。

一、信徒は指導者を尊敬する

一二節の表現、即ち「あなたがたの

間で労苦し、主にあってあなたがたを指導し、訓戒している人々」という表現は少々冗長に思える。はっきり「牧師」「長老」「監督」などの職名で書けばとも思うのだが、わざとこういう表現がなされているのにはそれなりの意図があると考えるべきだ。ヒントは「労苦する」、「指導する」、「訓戒する」という動詞がすべて現在分詞だということ。つまりパウロがテサロニケ教会に対して尊敬を払うよう求めた対象はかつて働いた人ではなく、この手紙が書かれた時、実際にテサロニケ教会の立て上げに加わっていた人々のことを指すと考えるべきである。恐らくかの地の教会の指導者たちの神学的知識はパウロに比べれば足りないものであったろう。しかしパウロはなおも主を立て、愛の労苦を担っているリーダーたちのことを知る(直訳)ように彼らに勧めた。相手を知るためには関心を持つことがまず求められる。そしてよい関心は愛から生まれる。そのように教会の指導層に対して愛を示し、尊敬することこそ成長の為の条件なのだ。

二、指導者は信徒をケアする

一四節においてパウロは一転、教会の指導の任に当たっている者たちに勧告を行う。しかしさっぱりギアが入らない万年アイドリング状態の信徒を戒めたり、小心

(これは意味的には「落胆している」を表わしている)な人を継続的に励ますということは「言うは易し、行うは難し」である。ともすれば逆切れしたり、あきらめたりしがちである。しかしパウロはそうした教会の問題児たちに対して寛容でありなさいと勧めている。勿論ここでの寛容は「じゃあ忘れていてもいいよ」という具合に放置しておくことでは無い。むしろ新共同訳が正しく訳出しているように「忍耐強く接しつづける」ことであり、それをするにはやはり神の愛が必要なのだ。神の愛こそが忍耐を生み出すのだから。

三、みんなで善を追求する。

恐らくまず信徒の方を向いて語り、ついで教会のリーダーたちの方を向いて語ったパウロは一五節においてその両者を見回して語っているかのように見える。ご承知の通り、当時のテサロニケ教会はユダヤ人キリスト者と異邦人たちの両方から主の名の故に迫害を受けていた。そのような状況下ではどうしても疑心暗鬼になりびくびくしやすいものである。しかしパウロはそのような負のスパイラルに教会が陥ることのないように、報復を厳に戒め、常に善を追い求めることを強く求めた。当たり前のことだが、これは「善とは何か」という哲学を展開することではない。もっと

実際的に人々を助け、人々に役立つ行動をすることである。使徒パウロは逍遙とした術学の徒ではない。徹頭徹尾真理の実践者であり、彼らにもそれを求めたのである。

* * *

以上、教会を成長させるための原則を三つ見たが、最後に応用問題の一つ出してみた。ある教会に若い牧師が派遣された。何分「若い」ので、懸命にはやるのだが、経験豊富で学識にも優れた前任者のようには出来ない。信徒たちはこの若いリーダーを軽んじ、ついに前任者のところに連絡をし、不満をいうようになる。その時前任の牧師はどう言えばよいのだろうか。「彼は若いからね。なんでも私に聞きなさい、あれはしようがないねえ」などと言うべきだろうか。それとも不満を述べる兄弟姉妹に対し、優しく「責任を持っているのは〇〇先生ですよ。足りないところはあつけれど、一生懸命働いている彼の汗と涙に感謝しないかね」と言うべきだろうか。答えは、そう後者である。敬うべきはいま働いている牧師なのだ。折角キリスト者になったのだ。無益な戦いはもうやめよう。善をもって悪に報い、寛容で、愛に満ちた共同体を建て上げようではないか。